

本が好きになるブックトークの会

2004年9月18日（土）富山県総合福祉会館福祉ホール

岡山市学校司書 永井悦重氏

永井さん「まず、私が勤務している中学校で4月に2・3年生を対象に行いました、図書館オリエンテーションのクイズ『クイズに答えて図書館を知るあなたは何か問わかるかな?』からやってみたいと思います」

①『新撰組の多くは農民だったというのは本当か?』

永井さん「何かこれについて答えていただける方はおられませんか?はいどうぞ」

会場 「多くは農民だったと思います。根拠はNHKの大河ドラマで見えています。」

永井さん「そうです。もちろん武士出身の人もいたわけですが、中心人物の近藤勇や土方歳三などはわりと裕福な東京都（現在）の農民出身だったようです。インターネットでも新撰組で検索すれば多くの情報がでてくるとは思います、本のほうがより確実だと思います。210というのは日本史の分類番号ですが、この近世から近代の辺りを見ますと新撰組に関しての資料がたくさんあると思いますから、どこの出身かというのは書いてあります」

②『映画〈THE LORD OF THE RINGS〉の原作名と作者の名前は?』

永井さん「いかがでしょうか?」

会場 「トールキンの『指輪物語』です」

永井さん「映画はつい最近完結しましたが、映画が出来る前から『指輪物語』は20世紀最大のファンタジーと言われ、読まれてきました。評論社の文庫本などは字が小さくて敬遠する人もいますが、映画化でよく読まれるようになりました。これは英米文学の「933ト」のところを見るとトールキンの『指輪物語』が本棚に並んでいます。同じ作者の関連図書として『ホビットの冒険』などもあわせて見るとよいと思います。インターネットで調べても、話題になっているので『指輪物語』なども出てくるのですが、本で調べた方がいいかと思います。」

③『今世界にはいくつ国があるか?』

永井さん「何で調べたら出ているかという答えでもいいですから・・・」

会場 「約160くらいだと思います。調べる時は、朝日の少年社会科統計からがよいと思います」

永井さん「インターネットでもおそらく調べられますが、私が子ども達と調べた時は、何年も前の情報がインターネットには出ていました。毎年更新される統計資料のほうが、情報は新しいと思いました」

④『南極の温度は何度か?』

永井さん「地理関係の本や理科年表のようなものでもわかります。ただこれは、一番近い日の温度が南極昭和基地のホームページなどで上がっています。それを見ると今が何度だというのが出てきますので、インターネットの方が新しい情報がわかってよいかと思

ます」

⑤『AMADA とは何か?』

永井さん「岡山市に本部があります。アジア医師連絡協議会の略です。アジアのボランティアの医師や看護師が集まって、地震などの自然災害や戦争があったところなどに出向いて、医療活動にあたる国際的なボランティア組織です。これはホームページにも載っていますから、今までの活動などをインターネットでほぼ見ることができ、インターネットの方が詳しい情報は得られるかなと思います。もちろん『現代用語の基礎知識』とか『イミダス』などにも出ていますし、AMADA が出している本も何冊かありますので、それでも調べることが出来ます」

⑥『人質になり開放された高堂さんは、何をしていたのか』

永井さん「当時新聞にも毎日記事が出ていましたし、テレビでも毎日のように報道されていましたが、新聞で調べるのが一番です。インターネットでも調べられますが、新聞の紹介という形で出ているところが多かったので、これはやはり新聞記事ということになるかと思います」

永井さん「このようにオリエンテーションは、実際に子ども達に本棚の前で見てもらったり、傍にあるコンピューターのインターネットで調べてもらったりして、どちらが早く見つけられるか、どちらの方が詳しい情報かというようなことを比較しながら行います。そのほかに新聞記事なども含めて、いろいろな調べ方を体験してもらおうということで、2年生3年生のオリエンテーションを今年の4月に実施しました。そのほか、図書館の開館時間、貸し出し期間と冊数、図書館利用の決まりなども説明します。あわせて図書館の約束として、①図書館は皆さんの知りたいこと調べたいことを徹底して応援しています。学校図書館にある本はたかが知れています。1万冊か2万冊位のものだと思います。市立図書館や県立図書館や国立国会図書館などとは比べ物にならないくらい、蔵書は少ないのです。けれども学校図書館にある本だけではなくて、公共図書館と連携をとりながら、皆さんの知りたいことは徹底して答えるという姿勢です。②図書館は読みたい本を手渡します。読んでもらいたいという本も手渡します。③図書館は読書の秘密(＝プライバシー)を守ります。誰が何を読んでいるかは第三者にはけっして知らせない。という3つの約束を伝えます。

そのほかにいろいろな行事も紹介します。たとえば、「宇宙って∞」というテーマで、秋に星空を眺める会を企画しました。宇宙って無限大といわれているけれど、本当にそうなのかを理科の先生に雑学的に話をいただき、星座関係の神話を劇にして演じました。また、星のよく見えるスポットを紹介したり、宇宙食を試食したりするという会にしました。それから放課後、学年やクラスを超えてみんなが図書館に集まって、『カラフル』 森絵都・作 理論社 を読むという読書会などもしています。そんな行事の案内もPRします。「図書館は自分の読みたい本を読んだり、本を紹介してもらったり、色んな行事をするところです。皆さん是非、学校図書館をしっかりと利用してください」と伝えます。あと実際に本棚の前を歩いてもらって、色んな本を見てもらいます。「図書館にはいろいろな本があります。皆さんには好きな本があって、この作

家の本はもっとどんどん読みたいというのもあるでしょう。小説はあまり読まないけれども図鑑や趣味の本、コンピューターの本なら読むという人もいますでしょう。けれども、図書館にはまだまだ皆さんの知らない本がたくさん並んでいますよ」といって、本学校図書館のオリエンテーションを終わります。

ブックトーク

9月に入って大分たちますが、皆さん今年の夏休みのイベントはなにがありましたか？深夜にわたって、アテネオリンピックを一生懸命観ていたという人がいるのではないのでしょうか。何が面白かったですでしょうか？日本が今までで1番たくさんメダルをとった大会だったとか、金メダルを東京オリンピックと同じくらい取ったとか、体操や柔道、水泳などいろいろな種目でメダルを取る試合が放映されていました。これは週刊朝日の増刊号のアテネオリンピック特集です。この表紙になっている人は誰でしょうか？はい、北島選手ですね。日本選手は本番になるとあがるということがよくあったのですが、この北島選手はあがらない。この北島選手は本人の努力もすごかったらしいのですが、北島チームというのがあって、水中カメラで泳ぎ方を映したりして、コーチやいろんな人が徹底して完璧に研究したそうです。

科学者がチームを組んで、未来の地球や人類はどうなっているのか、生き物はどうなっているかをチームで討論して、その成果を反映させて、コンピューターグラフィックにより想像的なビジュアルな世界を提案した本が出ました。これは「王様のランチ」と言うテレビ番組で紹介されたので、知っている人がいるかもしれません。ドゥーガル・ディクソンとジョン・アダムスの本で、『フューチャー イズ ワイルド』ダイヤモンド社という本です。これは500万年後、1億年後の地球のことが書いてあります。今は地球の温暖化といわれていますが、500万年後、地球は氷河期に入っていて、かなりの動物が死に絶え、新しい生物が誕生するということが書いてあります。たとえば500万年後の世界では、鯨なみの大きい巨大原人や、くちばしの長いガネットホエールという鯨が出現するそうです。一億年後の世界で、地球が氷河期を脱してまた暖かくなっています。南極も広い豊かな森林地帯に姿を変え、4枚の翼で標高1万メートルを滑空するグレートブルーウインドランナーという鳥が紹介してあります。これらの想像の動物は、今いる動物が進化したり、退化したりして、こういう動物が出現するだろうと書いてあるのです。けれども4枚の翼を持つ鳥は何がモデルで作られたのかは、後で読んで欲しいと思います。2億年後の世界は、今ある7つの大陸が、ひとつになって超大陸が出現すると書いてあります。この表紙の写真は何かわかりますか？これはオーシャンフリッシュという名前が付けられた生き物ですが、これは魚でありながら空を飛ぶことができます。今でも飛ぶことができる魚がいますが、そういう魚とカモメとを合わせた様な特徴を持ち、巨大化した生き物と説明してあります。フリッシュの翼というのは尾びれと腹びれと胸びれがありまして、強い風が吹いたときでも平気で飛び立つことができるそうです。フリッシュは、海面に漂っていると狙われて、格好のえさにされてしまうために、岩の間に安全な避難場所を見つけるのだというようなことが紹介してあります。他にもびっくりするような動物の出現が予想されています。これは単なるお話ではなくて、いろんな大学で活躍している研究者が何人も集まって、予想した生命の世界です。今は温暖化など、地球がたいへんだということでもいろいろ言われていますが、それを経て、1億年2億年後には人類は絶滅しています。こういう世界に本当になるのかどうか、地球が2億年後もあるかどうかということも疑問なのですが、皆さんはこれを読んでどう思われま

すか。『フューチャー イズ ワイルド』は、第2弾も出ています。

これは1億年後、2億年後の地球の本ですが、未来から過去に少し目を転じて見ますと、また違うものが見えてきます。皆さんの中に、テレビで時代劇を観るのが好きな人はいますか？トレンドイードラマは人気がありますが、その一方で時代劇が好きだという中学生が時々います。この中にも好きな人がいるかもしれませんね。そんな昔、富山県の隣の金沢市に、金沢藩・猪山家というお家がありました。その家から長年に渡って書かれた家計簿が発見されたんですね。それを見つけたのは、30代の若手の歴史学者の磯野道史さんです。あるとき、東京神田の古書店から家に電話が入り、予感を感じて見に行くと、江戸時代の終わり位の武士の家計簿がごっそりと温州みかんのダンボールに入って見つかり売られていたため、16万円出して買ったそうです。それをわくわくしながら調べていって、その結果が専門的な論文にもなったのだと思いますが、一般向けの『武士の家計簿—加賀藩御算用者の幕末維新』 新潮新書 という本になりました。今まで、「武士は食わねど高楊枝」というように、身分は上だったけれども経済的にはかなり困っていたというような川柳も伝わっているのですが、まとまった武士の家計簿というのはほとんど見つかっていなかったそうです。そのため、これによって明らかになったことがたくさんありました。これは大人向けの本なので、文字も小さいのですが、それほど難しい本ではないので、興味のある人は読めるかと思いません。御算用者というのは藩の会計係ですよ。そろばんの得意な人が出世していったわけです。そろばんで身を立てたのです。ただ武士の体面とかありますので、収入はそれほど少くないのですが、借金だらけなわけです。家財道具などを売り払って借金を返していったという現実が家計簿から見えてきます。それから、当時は女の人の力が弱かったため、社会的に役職に就くとかそういうことはなかったのですが、この村山家のおばさまは、年4回ある給料日に着物代ということでかなりのお小遣いをもらっていました。主人の小遣いはというと、今のお金に換算して月に5、190円ということで、あまり多いとはいえないですね。そういうことも分かってきましたし、当時離婚が随分多かったということも分かりました。武士の生活が生き生きと伝わってくる本です。

猪山家9代目の成之という人が結婚した時に、どういう予算で行ったかということも書いてあります。ちょうど成之さんが結婚した年に、NHKで放映されている新撰組が結成されています。今、新撰組はブームで、図書館でもコーナーを作ったりしています。このきっかけになったのは、『風光』という漫画だということです。その漫画家に協力してもらって作った『風光る京都—沖田総司と歩く新撰組の舞台』 小学館というガイドブックがあります。渡辺多恵子さんという人気漫画家です。これは京都や東京の新撰組の舞台になった所を案内しながら、新撰組がどのようにして作られ、どのようにして滅びていったかということが紹介してあります。それで、猪山家の当主が結婚したのが1863年なのですが、その年の2月に近藤勇や土方歳三、沖田総司などを含む浪士隊が京都に入るわけです。新撰組の結成はもう少し後なのですが、新撰組の原型ができた年です。次の年の1864年に池田屋事件などがあって、幕府側からみると新撰組が活躍しています。その幕府を倒そうとする側からみると、殺されたということになると思います。日本はその当時非常に矛盾が大きくなっていて、幕府を倒そうとする勢力と、幕府を守ろうとする勢力のふたつに分かれて戦うのですが、新撰組は幕府を守ろうとする側で戦いました。中心になる人達は農民出身が多かったのですが、非常に身分制度の厳しい時代でしたので、武士になりたいという気持ちがかかなり強かったようです。農民だけど武士になって、新撰組を結成して活躍するわけですね。新撰組の活躍する

時期は短く、1863年から最大限にみて1869年の6年間です。新撰組の解体が決定的になったのは鳥羽伏見の戦いで、この戦いに敗れて、京都を捨て東京に出てきます。この旧幕府軍と薩摩長州を中心とした新政府軍との戦いで、幕府軍の負けが決定的になったわけです。幕府はもうダメだということを新撰組の人達も感じたのではないかと思われる事件です。それから土方歳三は、最終的に函館の五稜郭に立てこもってそこで死ぬのですが、その前に沖田総司は明治元年に肺結核で死亡しています。近藤勇は捕らえられて、板橋で処刑されました。この当時どのような経過があり、新撰組の人達がどのような思いで活躍したのかということをとどけてもらえればよいと思います。

新撰組は、「誠」という文字の書いてある水色のような色の制服を着ていましたが、これは、ある国の民族衣装です。もちろんミニチュアですが、これをどうにか知っていますか？はい、チマ・チョゴリですね。これは大阪市内の韓国雑貨を売っているお店で手に入れました。民族衣装はその国の文化を象徴しているともいえます。今、日本では韓国ブームといわれています。NHKで放映されていた「冬のソナタ」は、若い人よりどちらかというと中年の女性に人気があるようですが。さてここに、『モギ 小さな焼きもの師』 リンダ・スーパーク あすなろ書房 という小説があります。ここに出てくるモギは12世紀の後半、韓国の西海岸の小さな村にいた少年です。血のつながりのないおじいさんと一緒に、橋の下に暮らしています。その日の食べ物をやっとなに入れて、何とか命をつないでいるという暮らしでした。[「おーいモギ坊、たーんと腹減らしとるか?」街道を戻ってくるモギに、橋の下からじいさんが呼びかけた。暮らしに困らない村の人達は日常の挨拶として、「腹いっぱい食べたかね」と声を掛け合うのですが、満足な食事などしたことのないモギとじいさんは、こんなあべこべの言い方を考え出して、自分たちの慢性腹ペコ状態を笑い種にした。]という文章で始まる物語です。このモギは、その日暮らしの苦しい生活ですが、その中でも物は取らない施しを受けないというのを信条にして生きてきました。このモギの住んでいる村は青磁という焼き物で有名な村で、モギはその製造過程を毎日楽しみに見ていました。で、焼物師になりたいと思うようになって、有名な腕のいい陶房に弟子入りをします。最初は怒られながら下働きをするうちに、焼物の基礎を学び取っていきます。その後モギはチャンスをつかんで行くのですが、どのようにして成功を掴んで行くのかは読んで欲しいと思います。まあ、一緒にサクセスストーリーといえないこともありませんが、モギやおじいさんの毅然とした生き方にも共感できるような本だと思います。

モギは12世紀に生きた少年ということになっています。韓国の歴史は、隣の国なのですが、あまり知らない人も多いと思います。これは『ひとめでわかる韓国の歴史』という本です。絵が多くて読みやすいものになっていますので、これを読めばざっとした韓国の歴史や日本との関係もわかると思います。旧石器時代から最近韓国でサッカーの試合があったその辺りまで書いてあります。どの国でも、国が出来る時の神話というのがありますよね。韓国の神話というのはタンゲン(檀君)神話というのがあるそうで、紀元前の頃、韓国がどのようにしてできたかという、古朝鮮という、朝鮮語ではプチョソンというそうですが、朝鮮半島や国がいかんしてできたかということにまつわる神話が紹介してあります。この神話には動物が出てきます。雨と雲と風を支配する3つの神が、3千余人々と一緒に白頭山において、お前達に360の地を授けようということで国造りを始めるわけですが、そこに熊と虎が訪ねてきて、人間になりたいと願いを伝えたそうです。人間になるには、ヨモギとニンニクだけで100日間日光を避けて洞窟で過ごしななければならないといわれ、虎

は逃げ出してしまうのですが、熊は約束を守り人間に変身したそうです。人間になった熊と国を造った神様が結婚して、子どもが生まれ、それが檀君王殮（タングンワンゴム）という最初の支配した人になったという神話が伝わっているそうです。熊が人間に変身するというのは、日本ではあまりないと思うのですが、そういうのが韓国にはあるそうです。

変身する話というのはいろいろありますよね。みなさん、変身する話で好きなものがありますか？ちょっと前まではウルトラマンに変身というのがありました。18歳のうら若き乙女が、突然90歳の老婆に変身させられてしまうということから始まる小説があります。今年の秋にアニメ化され上映されるそうですが、『魔法使いハウルと火の悪魔』という本です。この表紙の絵を描かれた佐竹美保さんは富山県の出身で、少し前に原画展示会があったそうですが、このダイアナ・ウィン・ジョーンズさんの作品はほとんど佐竹さんが絵を描いていらっしゃるんですね。佐竹さんの素敵な絵の表紙を見ただけでも、読んでみたいという気になります。なぜ18歳のうら若き乙女が90歳のおばあさんに変身させられたかという、この乙女はソフィー・ハッターという帽子屋さんの長女に生まれた女の子です。この帽子屋さんはインガリーという国にあって、ここはまだ魔法が生き続けている時代の国です。昔話によく出てくる1足で7リーグ進む靴とか、姿隠しのマントが本当にあった時代の話です。姿隠しのマントは、ハリー・ポッターにもでてきましたね。ヨーロッパなどの昔話にはたくさん出てきます。[ソフィー・ハッターは3人姉妹の長女でした。せめて貧しいきこりの子なら少しは出世の望みもあったでしょうが、あいにくそうではありません。両親は裕福でガヤガヤ町というにぎやかな町で、女の人向けの帽子の専門店を営んでいた。]みなさんちょっと、昔読んだ御伽噺や昔話を思い出してほしいのですが、3人兄弟ってよく出てきます。それで長男とか次男とか、長女、次女でもいいんですが、たいてい3番目が成功することが多いですよ。ソフィーも長女に生まれたので、いい人生ではないとあきらめていたのです。でも帽子を造る腕がとてよくて、お父さんが亡くなった後、お母さんが他の姉妹は修行に出して、ソフィーに店を任せます。ソフィーは一生懸命仕事をしながらも、あまり人生に希望を持たずにいたのです。腕がいいので、その帽子をかぶれば美しく見えるような出来のよい帽子だったものですから、魔法を使っているのではないかということで「荒地の魔女」がある日やってきます。ソフィーは魔女だと気付かないのですが・・・。「あなたとても素敵な帽子を売っているそうね。見せて頂戴」と言って、ダイヤモンドをちりばめたような豪華な服を着た女性は訪ねて来ます。お供にぼーっとした顔つきの赤毛の男の子を連れてきます。その女性はいろいろ帽子をかぶっていたのですが、突然口調が変わり、「荒地の魔女に張り合おうとするものがいたら、放っておかないのが私の方針。私に張り合っても無駄だよ」と言って帰ってゆくのです。魔女が立ち去る時に、あのお供の赤毛の若者はなんで私の顔を眺めていたのかしら、と思うとソフィーは顔に両手を当てました。と、ふにゃふにゃとなめし革にしわがよったような手触りがしました。はっとして手を見ると、しわだらけで筋ばっていて、手の甲には太い動脈が浮かび、ごつごつと節くれだっていました。灰色のスカートを持ち上げ足を見ると、やせて華奢なくるぶしに、靴の中でこぼことして足先。90歳くらいの人足に見えますが、気のせいではなさそうです。これだけを見ると、褐色で痩せてしなびた老女の顔を発見してしまったわけですね。それで、食べ物と肩掛けを持って、呪いを解いてもらうために、動く城に住んでいるハウルの所へ行こうと思うのです。ハウルの動く城はなかなか中に入れないのですが、やっと留守番の青年に話をして入れてもらえるのです。青年は、火の悪魔に呪いをかけられたと告

げます。「その呪いを解いてやるわけには行かない。どんな呪いかかけられているかをわかった人しか、その呪いを解けない」ということで、ソフィーはこの城に住み込んで火の悪魔とやり取りしながら、非常に変わったハウルという若者の魔法使いと暮らすようになるのです。魔法使いのハウルは、ふらっと出て行くと何日も帰ってこないような人で、非常に奇抜な格好をしています。そして、人に掃除をされるのがとても嫌なのだけでも、ソフィーはピカピカになるまで家の中を磨いたりするのです。そして、中身は18歳で90歳の老婆と若者ハウルの間に恋が芽生えるわけですが、それが最初はわからないのですが、なんとなくそういう雰囲気になっていきます。ハウルのほうはそんなことはないと思っているのですが、ソフィーの方がそうではないかと思うようになって意外な展開があるわけです。『魔法使いハウルと火の悪魔』、映画も楽しいのですが、本もたいへん面白いです。宮崎駿さんは『千と千尋の神隠し』その前に『もののけ姫』などアニメーションをたくさん作っておられますが、児童文学もたいへんよく読まれている方で、千と千尋のガイドブックなどには、参考にしたといわれる、日本や外国のファンタジーがたくさん紹介してあります。やっぱり、本の面白さから映画を作ろうという気になるそうです。

日本にも、魔法の世界や怪しい世界というのがありますよね。ヨーロッパだけではありません。これは何か知っています？ 『ゲゲゲの鬼太郎』ですね。この作者は水木しげるという人です。水木しげるさんは漫画もたくさん描いておられますが、自叙伝のような本も書いておられます。図書館にはその本もあると思います。これは、これは水木しげるが全面協力して書いた別冊宝島の『ゲゲゲの鬼太郎・妖怪100物語』という本です。この中にはですね、ハウルに出てきたような魔女も含めて、世界中の色々な妖怪を紹介したページがありまして、魔女のところにはこういう説明があります。[魔女は、中世のキリスト教会の異端として迫害された人が、悪魔と交わる特別な力を授けられ、作物や家畜に害をなすようになったものといわれている]ということで、非常に怖い邪悪な存在として書かれています。ハウルに出てくる魔女は随分違った雰囲気が出てくるし、やっぱり変化していくものだなと、つくづく思います。他には、ゴブリンですね。指輪物語などにも出てきますが、ゴブリンはイギリスにいるというような紹介や、狼男やドラキュラなども紹介してあります。これが世界編ですね。日本編では、鬼とか天狗とか一反木綿とか色々な妖怪の紹介がしてあります。日本各地に妖怪の伝説が伝わっているようで、その地図なども紹介してありますので、あとで見たいと思います。この中で、水木しげるさんが何故妖怪の世界に引き込まれたのかというような話とか、若い人にも人気のある京極夏彦さんという直木賞作家が、なぜ妖怪の世界に惹かれたのかという、妖怪と文芸の関係などということも「京極夏彦の妖怪文学を読む楽しみ」というページで語っておられます。それから、東京の赤坂や六本木や新宿や池袋など、いろいろなところに残る怪しい逸話やエピソードなども紹介してあります。たとえば乃木坂というところがありますが、その坂は、以前は幽霊坂と呼ばれていたとか、暗闇坂という妖怪が出るという坂が残っていると、鬼子母神が祭られている雑司が谷のお寺の紹介がしてあります。今は夜といっても、都会に行けば行くほど暗闇はなくなっているのですが、やっぱり真っ暗な闇の中に存在している妖怪や魔物が出てくる小説がたくさんあります。ホラー文庫や富士見ファンタジア文庫などにも妖怪ものが出てくる小説があり、図書館にも多く入っています。何故そういうものが受けるのかということを探るにも、参考になるかもしれません。図書館にもいろんな本がありますが、今日は、今、テレビや映画で話題になっていることに関連していくつかの本を紹介しました。